

# 『説文解字繫伝』にみられる反切下字混用 —梗摄入声と曾摄入声、および外転 —等韻と二等韻の間の—

東ヶ崎 祐一

(韓国慶熙大校)

南唐徐锴の《说文解字系传》有两种反切下字混淆现象：一是梗摄入声和曾摄入声之间的，一是外转一等韵和二等韵之间的。

本篇就此两种现象进行了分析和考察，结论如以下三点。

- (1) 关于梗曾两摄入声的反切混淆，实际上这是昔韵和职韵舌齿音之间的。职韵主元音，由于声母、介音和韵尾的前舌性影响，而变成前舌元音，由此造成与主元音狭窄的昔韵相混淆的现象。
- (2) 关于外转一二等韵的反切混淆，实际上这是外转一等韵舌齿音和二等韵之间的。外转一等韵主元音，由于声母和韵尾的前舌性影响，而变成前舌元音，由此造成与二等韵相混淆的现象。
- (3) 两种现象都反映出汉语回避舌头的前 > 后 > 前运动的趋势。

## 0. はじめに

### 1. 梗摄入声と曾摄入声の反切下字混用

- |                |              |
|----------------|--------------|
| 1.1. 論を進める前に   | 1.2. 反切の示す特徴 |
| 1.3. 変化の起こった条件 | 1.4. まとめ     |

### 2. 外転一等韻と二等韻の反切下字混用

- |                |              |
|----------------|--------------|
| 2.1. 論を進める前に   | 2.2. 反切の示す特徴 |
| 2.3. 変化の起こった条件 | 2.4. まとめ     |

### 3. 2つの現象の中国音韻史上における意義

### 4. 結語

## 0. はじめに

南唐(937 - 975)の徐鉉(920 - 974)が著した『説文解字繫伝』には、徐鉉と同時代人である朱翱(生没年未詳)の付けた反切(以下、繫伝反切と略称)が各文字に付けられている。

この反切について、王 1982 では「朱楷时代、《唐韵》已经通行，而朱楷独不遵用《唐韵》，当是根据当时实际语音而作反切，这是语音史的重要资料」と述べている。彼は『説文解字繫伝』が、当時用いられていた韻書である『唐韻』の反切を用いていないことから、この反切の示す音が当時の実際の発音を表している点で重要であるとしているのである。実際、徐鉉の兄である徐鉉の校訂した『説文解字（いわゆる大徐本）』には、『唐韻』の反切が使われているが、朱翱の反切はこれとは全く違うものである。

繫伝反切の研究はあまり行われておらず、総合的な研究としては嚴 1943、張世祿 1944、梅 1963、王 1982、張慧美 1989 の 5 編をみるのみである。これら各研究における反切の声類や韻類の分類結果をみると、嚴 1943、張世祿 1944、張慧美 1989 では『広韻』の同用規定に近いと主張しているのに対し、梅 1963、王 1982 のそれはより近世的で、宋代等韻図などにみられる体系に近い、と相違している。

また、先行研究では、主に繫伝反切の声類や韻類の分合状況の切韻体系との差異について論じており、声類や韻類内の細かな変化（分化や部分的合流）についてはあまり言及されていない。本稿ではそのような現象、すなわち繫伝反切にみられる、中古漢語では異なる 2 つの韻類に属する音が、反切において混用される現象を取り上げる。その現象とは梗撰入声と曾撰入声の反切下字混用と、外転一等韻と二等韻の反切下字混用の 2 つである。

本稿においては、まず各々の反切下字混用について、個別に例を整理・観察し、それらがどのような条件下で起こっているのかを提示する。そして 2 つの現象は、一見全く違う変化であるように見えるが、実はともに同一の原理のもとで起こっているものであることを提示する。ここで取り上げる現象を反映している反切例はごく少数しか現れないのだが、それらが示す変化は撰や等位といった中古漢語音体系の枠組みを超えた現象であり、また漢語の通時的音変遷を考える上で重要な示唆を与えるものである。

## 1. 梗撰入声と曾撰入声の反切下字混用

### 1.1. 論を進める前に

まず、梗撰入声と曾撰入声の反切下字混用について取り上げる。

繫伝反切における梗撰入声と曾撰入声の反切下字混用は、既に張世祿

1944 で触れられているが、より明確に指摘したのは王 1982 である。彼は梗撰入声と曾撰入声の反切下字が混用されていることから、この2つの韻類が合流していると考え、梗撰舒声韻（王の分類では「庚青」）と曾撰舒声韻（「蒸登」）の各々に対応する入声韻を「陌職」というひとつの韻類に分類した。

梗曾両撰が特に北方方言において中古漢語以降の早い時期に合流したことは、宋代等韻図などの音資料に現れている現象である。その詳細については佐藤 1973 や花登 1974 で論ぜられているが、これらによれば梗曾両撰の合流は既に中晩唐期の古体詩の押韻や反切資料に萌芽がみられ、しかもそれは入声から始まっている。

繫伝反切にみられる現象も、梗曾両撰の合流が入声から始まるという流れに沿ったものであり、それだけみれば何ら不思議とすべき問題ではない。しかし、他の論者がすべてこの通りに考えているわけではない。張世禄 1944 が梗曾両撰入声の反切下字混用について触れているのは前述した通りだが、それでも両撰の区別については存在したものと扱っている。また蔣・呉 1997 では王に反論して、唐末～五代期の押韻で梗撰入声と曾撰入声とが押韻する例が少ないことから、入声韻でも梗撰と曾撰を分離させることを主張している (pp. 53-67)。

実際、繫伝反切の中に梗撰入声と曾撰入声の反切下字混用を示す例は非常に少ない。繫伝反切では梗撰入声の音を示す反切は 229 例、曾撰入声を示すものは 129 例ほど存在するが、反切下字混用を示すものはわずか 10 例であり、全体に占める割合は 2.8% (10 / 358) と非常に低い。また、それらの反切の音韻的特徴についても、王 1982 では十分検討されていない。

以下ではこれらの反切およびその示す音を検討することにより、反切下字混用という現象がどのような音韻的状况を反映しているのかを考えることにする<sup>1)</sup>。

## 1.2. 反切の示す特徴

繫伝反切において、梗撰入声と曾撰入声が混用されている反切は、以下の通りである。

## (1) a. 反切婦字が梗撰入声、反切下字が曾撰入声（8例）

麦韻 𪗇：爰測反 柵：爰側反<sup>2)</sup>  
 昔韻 碧：彼力反 祐：時即反 繡：自即反  
 爽：希式反 圜：以陟反 疫：兪昞反

## b. 反切婦字が曾撰入声、反切下字が梗撰入声（2例）

職韻 荊：齊石反 食：神隻反

この中には、誤写や反切婦字の誤認によると考えられるものも存在する。

・𪗇：爰測反、柵：爰側反は「側麥反」の誤りか

『広韻』では燥・柵の声母は初母であるが、反切上字の「爰」は云母であり、婦字と合わない。ところで、この2つの同音字（梗撰麦韻初母）の反切をみると、「側麥反」が4例存在する（策など）。繫伝反切では一つの音について複数の反切が用いられることが多いが、全体的には同一音に同一の反切を用いる傾向がある。そのことから考えると、「爰測反」「爰側反」はもともと「側麥反」であったものが、伝写の過程で反切上字と下字が逆転し、さらに「麥」が「爰」に、「側」が「測」に書き誤られたことによって生じた誤りだと考えられる<sup>3)</sup>。

・爽：希式反は反切婦字を「歳」と誤ったためのものか

「爽」は『広韻』では昔韻書母の音であるが、反切上字の「希」は曉母で声母が合わない。ところで『広韻』で「希式反」の示す音（曾撰入声職韻曉母）をもつ字をみると、「爽」という字がある。「爽」は『説文』にみえない字であるが<sup>4)</sup>、その同音字「𪗇」には「希式反」という反切が使われている。このことからすると、「希式反」は「爽」と「𪗇」との字面の類似から誤って付けられた反切であると考えられる。

## 1.3. 変化の起こった条件

1.2.の(1)で挙げた反切混用例から、誤写や類推の結果生じたと思われるものを除いた結果、確実に梗撰入声と曾撰入声の混用を示す反切は次の7例である。

(2) 碧：彼力反 祐：時即反 繡：自即反 圜：以陟反

疫：兪旻反　煎：齊石反　食：神隻反

(2)に挙げた反切をみると、反切下字の混用を示す例は梗撰入声では三等AB類の昔韻、曾撰入声では三等BC類<sup>5)</sup>の職韻のものだけである。つまり、繫伝反切にみられる梗撰入声と曾撰入声の反切下字混用は、実はそれぞれの三等韻である昔韻と職韻の混用なのである。

更に、(2)に挙げた反切の下字についてみてゆくと、ひとつの傾向がある。すなわち、これらの反切下字は声母がすべて舌歯音である。繫伝反切では反切下字に舌歯音を専用するということはないので、このことは何らかの現象を反映していると考えられる。更に反切帰字については、梗撰入声には「碧：彼力反」の例があって決して舌歯音字ばかりではないのだが、曾撰入声では反切帰字は舌歯音字のみである。

反切下字の混用は韻母の合流あるいは音声的近似を反映しているものである。梗撰と曾撰の韻尾は、唐末～五代期にはともに硬口蓋的な $-ŋ$ 、 $-k$ であったと考えられている（花登 1974）。そして昔韻も職韻もともに三等韻であり、口蓋化介音 $-i-$ をもつ。2つの韻の違いは、主母音が広い $e$ であるか（昔韻）、狭い $a$ 、 $e$ であるか（職韻）だけである。

梗撰韻母の主母音は、韻尾の口蓋性に同化して主母音の開口度がやや狭まっていたと推定される。一方、曾撰の主母音は中舌音であり、周囲の環境によってさまざまな変異を生じると考えられる。職韻のように、介音 $-i-$ と硬口蓋化韻尾に挟まれる環境では、主母音の実現はより前舌的になると考えられるのである。

反切下字の混用に関係する曾撰入声字が舌歯音字のみであることは、次のような理由があると考えられる。すなわち、舌歯音声母は舌尖が調音に関与する子音であり、どちらかといえば前舌的な特徴をもつ。これに介音 $-i-$ と硬口蓋韻尾をもつ職韻韻母が後続する場合、中舌的な主母音は声母・介音・韻尾とも前舌的な環境に囲まれることになるので、その音声的実現は最も前舌的に、ときによってははっきり前舌母音で発音されたと考えられる。

以上のことを図式化すると次のようになる。

- (3) 昔韻                            -iek > -iek (韻尾に同化)  
 職韻 (舌歯音声母) -iək > -iek (周囲の環境に同化、昔韻と合流)

このため、舌歯音声母をもつ職韻の字音は昔韻のそれと近似あるいは合流して、繫伝反切では反切下字の混用という現象で現れたのである。

職韻の舌歯音以外の声母が反切混用に現れない理由としては、以下のよう  
 に説明することができる。まず牙喉音開口声母のもとでは、声母が前舌  
 的なものでないため、主母音 $\text{ə}$ を前舌化させる環境としては舌歯音よりも  
 弱く、主母音は中舌的に実現した。また声母が唇音や牙喉音合口の場合、  
 主母音は音韻論的にはB類に属する /e/ であったが、先行する合口介音 -u-  
 や唇音声母の円唇性の影響を受け、やはり中舌的に実現した。このように  
 舌歯音以外の声母のもとでは、主母音が中舌的に発音されたために、たと  
 え昔韻の主母音が狭化してeに近くなっていたとしても、それらの韻母を  
 表わすためにはなお不適當であったと考えられるのである<sup>6)</sup>。

#### 1.4. まとめ

以上のことから、繫伝反切における梗攝入声と曾攝入声の反切下字混用  
 は、実際には昔韻と職韻 (舌歯音声母) との間でのみ起こったものであり、  
 それは中舌的な主母音 $\text{ə}$ が、舌歯音声母・介音 -i-・硬口蓋韻尾- $\text{ɰ}$ に挟まれ  
 るという環境の中で前舌化したことによる、と結論づけることができる。

梗攝入声と曾攝入声の合流は宋代以降更に進む。曾攝では職韻で主母音  
 の前舌化が進行し、牙喉音開口声母のもとでも主母音がeに変化した。一  
 方、梗攝では主母音の狭化がさらに進み、拗介音をもたない二等韻までも  
 が入声を除いて主母音が狭く変化した。こうして、宋代等韻図にみられる  
 一等登韻・二等庚耕韻・三四等庚清青蒸韻という梗曾両攝の合流に到った  
 のである。更に一・二等韻の合流によって、『中原音韻』の庚青韻が成立す  
 る。繫伝反切にみられる反切下字混用は、この一連の変化の先駆けをなす  
 ものであった。

## 2. 外転一等韻と二等韻の反切下字混用

### 2.1. 論を進める前に

もう一つ、外転一等韻と二等韻の反切下字混用について取り上げる<sup>7)</sup>。

そもそも中古漢語の音体系では、外転一等韻は奥舌広母音を、二等韻は前舌広母音を主母音にもつ直音韻と考えられている<sup>8)</sup>。これらは母音体系の単純化により、古官話期までにすべて合流するが、そのときにも外転一等韻 a に対して二等韻は牙喉音開口で介音を発生させて ia となり、中古漢語の前：後の対立の痕跡をとどめる。

外転一等韻と二等韻の主母音合流の過程を考える際にカギとなる現象は、邵雍 (1011-1077) の『皇極経世書声音唱和図』に現れる<sup>9)</sup>。これの「十二音図」では、一等韻の音をもつ字を「開」の欄に、二等韻の音をもつ字を「発」に記すが、この図では外転一等韻のうち「丹大貪覃南哉在采才三」の10字が「発」の欄に置かれるのである。

これら「発」の欄に置かれた一等韻字には、いくつかの特徴がある。

・声母は舌歯音に限られる

唇牙喉音を声母にもつ一等韻字は「開」の欄に置かれる

例えば影母字「安」は「開」の欄に配置される。

・韻母は蟹・山・咸摂の開口一等である

一等韻でも効摂字である「草」や「曹」、また蟹・山・咸摂一等でも合口の「内」や「兌」は、「開」の欄に配置される。

この現象は、外転一等韻と二等韻の合流が一度に起こったのではなく、声母や韻母の条件によって段階的に起こったことを示している<sup>10)</sup>。

ところが、『皇極経世書声音唱和図』よりも1世紀近く成立の早い繫伝反切にも、外転一等韻と二等韻のかかわる現象が存在する。すなわち、外転一等韻と二等韻の反切下字が混用される例が存在するのである。

これについて最初にはっきりと指摘したのは梅 1963 である。その中では蟹摂・山摂の一等韻の中に二等韻の反切下字を取るものが存在することが指摘されている。そしてその一部、反切母字の声母が精組であるものについては、二等韻に精組声母を取るものが存在しないことに理由を求めている。ただしこれらの例がなぜ蟹摂・山摂のみに存在するかについては、理由を明らかにしていない。

以下ではこの現象が、どのような条件下で起こっているかを考察する。そして中古漢語から古官話への変化の中で、外転一等韻と二等韻の主母音

が合流する過程の一端を明らかにする。

## 2.2. 繫伝反切における外転一等韻と二等韻の混用

繫伝反切においては、一等韻と二等韻の区別は、重韻の合流等は見られるものの中古漢語の体系とほぼ同じである。ところが、ごく少数であるが、一等韻の音を表示するための反切に、二等韻の音をもつ字が使われたり、またその逆となるものが存在する。今それらを拾い出してみると、次の通りである。

### (5) a. 一等韻の反切下字に二等韻字が用いられる例（11例）

蟹摂

泰韻 購：魯械反 稽：恒夬反

代韻 賚：勒戒反

山摂

寒韻 菱：自閑反

旱韻 瓚：自限反

翰韻 瀆：箭鴈反 饋：箭鴈反 嬾：箭鴈反 𩇛：古晏反

曷韻 少：他刮反 較：彭札反

### b. 二等韻の反切下字に一等韻字が用いられる例（2例）

蟹摂

怪韻 玠：古頼反

山摂

禡韻 覓：閑旦反

これらの中にも、やはり誤写や諧声符からの類推によるものと考えられる例が存在する。それは以下に挙げるものである。

・菱：自閑反は「自闌反」の誤りか

同音字の反切に「自闌反」（「残」など）が存在するので、字画の類似による誤写と考えられる。

・𩇛：古晏反は「古案反」の誤りか

「𩇛」は『広韻』では「古案切」(翰韻見母開口)・「下晏切」(諫韻匣母開口)の2音が存在するが、このことも誤写の一因ではないかと思われる。

- ・𩇛：閑旦反は「閑袒反」の誤りか(張世祿 1944、p. 162)
- ・𩇛：恒夬反は「害」からの類推および誤写によるものか

反切上字「恒」の声母は匣母であり、『広韻』所載の音「苦蓋切」(泰韻見母開口)とは韻母のみならず声母も一致しない。一方で、「𩇛」の諧声符である「害」の音は『広韻』で「胡蓋切」(泰韻匣母開口)である。「害」の繫伝反切は「恒艾反」であることから、「𩇛」についても諧声符の類推から、本来の反切は「恒艾反」あるいは「恒夬反」であったと考えられる。ところが誤写によって「艾」が「夬」と書かれたため<sup>11)</sup>、「恒夬反」という反切が生まれたと考えられるのである。

- ・𩇛：他刮反は「他割反」の誤りか

同音字の反切に「他割反」(「達」など)が存在するので、字画の類似による誤写と考えられる。

- ・𩇛：彭札反は「拔」からの類推によるものか

### 2.3. 変化の起こった条件

2.2.の(5)で挙げた反切混用例から、誤写や類推の結果生じたと思われるものを除いた結果、確実に反切の混用を示すと考えられる例は次の7例である。

- |           |       |       |       |
|-----------|-------|-------|-------|
| (6) 購：魯械反 | 賚：勒戒反 | 瓚：自限反 | 瀆：箭鴈反 |
| 𩇛：箭鴈反     | 嬾：箭鴈反 | 玠：古頼反 |       |

これらについて、反切に用いられる字の音韻的特徴を調べてみる。

前節で挙げた『皇極経世書声音唱和図』では、「発」の欄に置かれる外転一等字には共通の特徴があった。繫伝反切の外転一等韻と二等韻の反切下字混用についても、それが音韻現象の反映であるならば、異例な反切には何らかの共通する特徴があることが期待される。

そのことを踏まえてみると、反切帰字や下字に現れる外転一等韻字には、次のような特徴が指摘できる。

- (7) a. 声母は舌歯音である。  
 b. 韻母は蟹撰・山撰の開口に限られる。

まず(7a)については、例に現れる帰字の声母は精組及び来母である。また(7b)については、蟹撰は前舌母音 -i を、山撰は歯茎音 -n, -t を韻尾とする。後舌的な韻尾をもつ効撰(韻尾 -u) や、唇音韻尾をもつ咸撰(韻尾 -m, -p) では混用がみられない。

つまり(6)の例は、前舌的な声母と韻尾に主母音が挟まれているという環境が強く作用しているものばかりなのである。前述した通り、舌歯音声母は前舌的な特徴をもち、また蟹撰・山撰の韻尾もともに前舌的である。このとき後舌的な主母音は、声母と韻尾の前舌性に同化して、前舌的に発音される。また開口に限られるというのは、合口介音 -u- に伴う後舌性が、声母と韻尾の同化作用を阻害したためと考えられる。

更にこの反切下字の混用については、「音体系の空き間」という点からも説明できる。一等韻と二等韻は主母音の音色だけではなく、結合する声母についても相違している。すなわち一等韻は端組・精組と結合、知組・莊組とは結合しないのに対し、二等韻は知組・莊組と結合、端組・精組とは結合しない。これには例外も存在するが(『広韻』『打』徳冷切など)、ほとんどは上に挙げた結合法則に従っている。しかし、別な観点から見れば「端組・精組+二等韻」は「音体系の空き間」なのである。一等韻主母音の前舌同化の受け皿としてこの「音体系の空き間」が機能したのである。また「購」・「賚」の場合、この2字の音(蟹撰一等開口来母)はいずれも声調が去声であるが、蟹撰二等開口来母去声という音節は存在しない。この場合でも「音体系の空き間」が存在したので、主母音の前舌化は無理なく起こることができたのである。

誤写として処理した反切の中にも、音変化の反映と解釈できるものが存在する。「𦵏: 自閑反」「𦵏: 他刮反」は声母が従母・透母、韻母が山撰一等開口で、声母も韻尾もともに前舌的である。また「𦵏: 閑旦反」についても、反切下字の「旦」は山撰一等開口端母の音をもつ字であるが、やはり声母も韻尾も前舌的である。「旦」の繫伝反切は「兜散反」で、その反切下字「散」の声母も韻尾も前舌的であることからすれば、「旦」の主母音は

前舌化していたと推定され、それが二等韻の韻母を表すことも可能ということになる。いま「旦」を下字に用いている反切を拾い出してみると、次の通りである。

(8) 歎炭：他旦反　　嘆：但旦反　　賛：子旦反　　散：四旦反  
 羅：那旦反

これら(8)に挙げた例に現れる反切帰字は、すべて山攝一等開口舌歯音字で、声母も韻尾も前舌的なものである。このことから「旦」も実際には主母音が前舌化していた可能性が高い。

さきに外転一等韻と二等韻の合流の過程を示す『皇極經世書声音唱和図』での現象を取り上げたが、これと繫伝反切における現象を比較すると、2つの間には条件の違いが存在することに気付く。すなわち、『皇極經世書声音唱和図』では、舌が調音にあまり関与しない -m が韻尾である咸攝一等舌歯音字も「発」の欄に置かれるのである。

韻尾が -u, -ŋ である効攝・宕攝は変化が起こっていないことからすれば、『皇極經世書声音唱和図』の示す音体系では、声母が歯茎音でありかつ韻尾が後舌的でなければ、 $a > a$  の変化が起こるようになっていたのである<sup>12)</sup>。

以上のことから、『皇極經世書声音唱和図』にみられる一等韻の二等韻への変化は、繫伝反切にみられる外転一等韻と二等韻の反切下字混用と同一の変化であり、しかも変化の起こる条件はやや緩やかになっている、つまり外転一等韻と二等韻の変化がよりいっそう進んだ状態であると言える<sup>13)</sup>。

#### 2.4. まとめ

以上のことから、繫伝反切における外転一等韻と二等韻の反切下字混用は、次の条件下で起こった現象であると言える。

- (9) a. 外転一等韻字の声母が舌歯音である
- b. 外転一等韻字の韻母が蟹・山攝の開口である

このとき後舌的な一等韻の主母音は、声母も韻尾も前舌的なものであるため、周囲の環境に同化して前舌化した。その結果、外転一等韻字の反切下字に二等韻字が用いられ、また二等韻字の反切下字に外転一等韻字が現

れるという現象が起こったのである。

### 3. 2つの現象の中国音韻史上における意義

以上、繫伝反切に見られる2つの反切下字の混用という現象について論じた。その結果、次のようなことがわかった。

まず梗攝入声と曾攝入声の反切下字混用は、舌歯音声母をもつ職韻の主母音が、周囲の環境に同化して前舌化し、開口度がやや狭まっていた梗攝昔韻の主母音と近似したために起こった現象である。そして外転一等韻と二等韻の反切下字混用は、蟹・山攝開口かつ舌歯音声母という条件下で、後舌的な一等韻の主母音が声母や韻尾の前舌性に同化して、前舌的な二等韻の主母音に近似したための現象である。

2つの現象は、一方は音韻衝突が起こるところで起こり、もう一方は「音体系の空き間」を埋める形で起こった。一見これらは性格が正反対のように見える。しかし、その変化を起こした音節の音配列を考えれば、2つの現象は実は同じ性格のものであることがうかがえる。

この2つの現象に共通して言えることは、後舌・中舌的な主母音が前舌化する現象であること、そして前舌化の条件としては、声母が舌歯音であること、及び韻尾が *-i, -n, -l, -k* のような、前舌的特徴をもつ音であることである。

後舌・中舌的主母音が前舌的な音に挟まれる場合、舌は前>後>前と動くことが要求される。この動きは舌に過重な負担をかけることになり、音配列上好ましいことではない。

また中古漢語の場合、現代中国語の各方言よりも子音や母音の数が多く、IMVE/Tと表記される音節構造の各要素に多彩な区別が存在した。元來単音節語である漢語では、複雑な音節構造と多彩な音の区別が存在した方が、単語の弁別には都合が良かった。しかしそのような特徴は、音の微妙な区別が必要であり、言語運用の際には話者や聞き手に相当の負担をかけると考えられる。そのため、より発音を単純で簡便なものにしようとする変化が起こった。そのとき変化の標的になったものの1つが、後舌・中舌的主母音が前舌的な音に挟まれる音節である。

昔韻と舌歯音声母をもつ職韻の合流が起こるには、もう一つ要因があっ

たとえられる。それは中古漢語の音体系においては、同一撰内の三等韻で主母音の前:後だけで区別される対立(すなわちAB類:C類の対立)が、舌歯音声母の下ではほとんどないということである。梗撰と曾撰の場合、韻尾の影響で梗撰全体の主母音が狭化する傾向にあった。そして梗撰の主母音は、もともと主母音が中高母音である曾撰に近似したと考えられる。C類は近似するAB類が同一撰内に存在する場合、多くは舌歯音字をもたない。また流撰の尤韻・幽韻のように、C類が舌歯音字をもつ場合、逆にAB類が舌歯音字を欠く形になっている<sup>14)</sup>。このような体系的な制約があったため、主母音が類似してきた昔韻と職韻の違いを舌歯音声母の下で保つのは難しく、ついに両者の合流を引き起こすことになったのである。

一方、外転一等韻と二等韻の場合は、合流の一因としてこれらの対立が広母音の間のものであったことが挙げられる。一般に広母音の前:後の対立は非広母音の場合より判別が難しい。そのため、母音体系が簡略化する際に、広母音の前:後の対立は解消されて合流する方向にあったのである。そしてその合流はまず蟹・山撰開口一等韻かつ舌歯音声母という条件下で起こった。そのとき、前述したように「端組・精組+二等韻」という音連続の欠如による「音体系の空き間」が、変化の受け入れ先として働いたのである。

後舌・中舌的な主母音が、前舌的特徴をもつ音に挟まれたときに前舌化するという現象は、現代中国語諸方言の中にもいくつか存在する。最も端的な現象は北京語などの官話系方言で、*/-ian/*と解釈される韻母が $[-ien]$ と発音されることである。これは通時的には、山咸撰開口牙喉音二等に由来する*-ian*が、前舌的介音および韻尾に挟まれた環境でより前舌化し、山咸撰開口三等に由来する*-ien*と合流したものである。

また広東語では、中古漢語の臻山撰一等韻母が、声母が舌歯音か唇牙喉音によって、次のような異なった対応を見せる(黄1967)。

(10)	舌歯音声母	唇牙喉音声母
臻撰一等合口	$\text{ɔn, ɔt}$	$\text{en, et (u:n, u:t)}$
山撰一等合口	$\text{y:n, y:t}$	$\text{u:n, u:t}$
山撰一等開口	$\text{ɛ:n, ɛ:t}$	$\text{ɔ:n, ɔ:t}$

これも前舌の声母と韻尾に挟まれた主母音が、前舌化した結果であると考えられる。

漢語史に目を転じると、次のような現象がある。王 1936 は六朝期の押韻から当時の韻部の変遷を辿った論文だが、それによると、中古漢語で脂韻合口舌齒音の音をもつ「綏・誰・追」などは、南北朝第一期（4世紀末～5世紀後半）には微韻字と押韻していた。ところが第二期（5世紀末以降）にはこれらの字は、中古漢語と同様脂韻字と押韻するようになる（pp. 801-802）。王の指摘する現象は、変化の起こった条件が、繫伝反切における梗撰入声と曾撰入声の反切下字混用の場合と非常に似ている。微韻はいわゆる三等C類韻で主母音は $\text{ə}$ であるが、「綏・誰・追」などの場合は、声母・介音・韻尾の前舌性に同化して、ついに脂韻合口に転入したのである。

ここで挙げた現象はすべて、中国語が共時的にも通時的にも、舌の動きが前>後>前となる音連続を回避しようとする傾向を示すものである。その傾向は中古漢語～古官話の間の変化においては、類似の韻母が合流を起こすときの変化の契機として働いたのである。

そして、繫伝反切にみられる2つの現象は、一方は梗撰と曾撰の合流、もう一方は一等韻と二等韻の合流という、中古漢語と古官話の間で起こった重要な音変化の、早い時期における反映である。これらの合流の過程では、まず「声母・（介音）・韻尾は前舌的だが、主母音のみ後舌・中舌」という音配列をもつ音節において、主母音を前舌化させることによって発音労力の軽減をはかるために変化が起こった。そして同様の変化は、同じ韻母をもつ音節全体に広がっていったのである。

#### 4. 結語

本論文では繫伝反切にみられる2つの現象、すなわち梗撰入声と曾撰入声、および外転一等韻と二等韻の間の反切下字の混用について考察した。その結果、以下のことが明らかになった。

まず、梗撰入声と曾撰入声の反切下字混用については、実際には昔韻と職韻舌齒音字の間の混用であり、それは職韻舌齒音字の主母音 $\text{ə}$ が、声母、介音および韻尾の前舌性に同化して前舌化したことが原因である。

また、外転一等韻と二等韻の反切下字混用については、実際には外転一

等韻舌齒音字と二等韻の間の混用であり、それは外転一等韻舌齒音字の主母音 **a** が、声母および韻尾の前舌性に同化して前舌化したことが原因である。

そして、2つの現象はともに、舌が前>後>前と動く音連続を回避するための音変化を反映したものである。

以上を結論として、本稿をしめくくる。

<注>

- 1) 調査のための底本としては、祁寯藻本（台北：華文書局、1971）を用い、四部叢刊所収本などもあわせて参考にした。  
また中古漢語の音価は、原則として平山 1976 に従うが、論を進める必要上改変した部分もある。
- 2) 「爰側反」は四部叢刊本による。祁寯藻本では「妻側反」であるが、これは「爰側反」の示す音が「柵」の字音とあまりにかけ離れ過ぎているため、伝本の筆写者もしくは校訂者が反切上字を類似の字画でかつ声母の類似している文字に替えたものと思われる。ただし「妻」は清母字であるため、声母の不一致は依然として残されたままである。
- 3) これと類似の例としては、「𦉳」の反切が祁寯藻本で「普惡反」となっているのに対して、四部叢刊本では「惡厝反」となっていることが挙げられる。これは伝写の過程で「普」と「惡」が上下転倒し、更に「普」が反切下字として不適当なので、字画が似ていて帰字と韻母が同じ「厝」に書き換えられたためであると考えられる。
- 4) 同一字とみなすこともできる『𦉳』は『説文』にみえるが、繫伝反切は「卷于反」。この字および反切音は『広韻』にもみえる。
- 5) 職韻がB類とC類の2種類の主母音をもつことは、平山 1966 を参照。
- 6) 繫伝反切の音韻体系で昔韻と職韻の音声が近似していたと考えると、なぜ舌歯音以外の「碧」の反切下字に職韻の「力」が使われているかの説明も容易になる。この字は昔韻唯一のB類所属字（『広韻』彼役切）であり、舌歯音以外では職韻と音韻衝突を起こす可能性のあるただ一つの音節である。この主母音が周囲からの同化により狭化して **-iek** となれば、職韻B類（唇音・合口牙喉音など）の韻母と同一になり、職韻字を反切下字に取ることも可能になると考えられるのである。

なお繫伝反切において、「碧」は陌韻三等の反切下字としても用いられる（例：「逆」言碧反）。これによって職韻と陌韻三等が系聯するため、張世祿 1944 ではこの2つの韻が合流していたとしている。しかし『篆隸万象名義』には「碧」に

- 「彼戟反」の音が付いており（周 1936, p389）、陌韻三等相当の音が存在したこともわかる。そして反切下字として「碧」を用いるときにはこの音を用いていると考えることもできる。職韻と陌韻三等の系聯は「碧」を媒介にする例のみであり、また繫伝反切ではある字の反切から導き出される音と、その字が反切に用いられるときの音が一致しないこともままあるため（例えば「索」の繫伝反切は「思落反」で鐸韻相当であるが、反切下字としては陌韻二等・麦韻の韻母を表すものとして用いられる）、必ずしも職韻と陌韻三等が系聯すると考える必要はない。
- 7) ここでの「外転」は、韻図にみられる「内転」「外転」の用法とは違って、遠藤 1988 に言うところの「言語学の内外転」(p. 135) としての用法である。これは「内転」「外転」を主母音の狭・広の差と解釈したものであるが、臻摂を内転、果摂・宕摂を外転に帰属替えさせる必要があるものの、諸方言への変化やそれらにみられる音韻現象を説明するには非常に有用な分類法である。詳しくは頼 1958 も参照されたい。
- 8) 中古漢語の音体系においては、外転一等韻には a, ʌ が、二等韻には a, ɐ のそれぞれ 2 種類の主母音が存在した。これらは 9 世紀の『慧琳音義』では、同じ等同士で合流している。繫伝反切においても、一部には区別が残っているようだが（一等韻の泰韻と咍灰韻など）状況はほぼ同じである（張世祿 1944, 135-137 など）。
- 9) 『皇極經世書声音唱和図』については、詳しくは周 1936 および平山 1993 を参照。
- 10) この現象について、周 1936 では「蓋當時一等韻與二等韻讀爲一類（元音爲 a）」とのみ述べる (p. 594)。また平山 1993 は、二等韻唇牙喉音の主母音を /ja/ と解釈する立場から、泥母を除く端組、精組および軽唇音（四音群）が「音声的には主母音 /a/ をもつ洪音開口韻母と結合する場合には比較的明るい音色を有し、その点で「一音群（筆者注：牙喉音および重唇音声母）」の「發」声母が口蓋化によって明るい音色をもつと共通するところがあった」(p. 70) ためとする。
- 11) 「夬」は「丈」のように右払いを左払いに交差させて書くこともあり、その字体が「艾」と紛れたものか。
- 12) 韻尾が -u である効摂については、介音 -u- が同化作用をブロックしたのと同様、-u の後舌性が主母音の前舌化を抑制するように作用したのである。表に現れない宕摂の場合も、おそらく韻尾 -ŋ の後舌性により外転一等韻と二等韻の合流が起こらなかったことが推定できる。韻尾をもたない果摂の場合は、主母音が他の一等韻と違い ɨ に変化したため、声母が舌歯音でも a と合流することはなかった。
- 13) ところが、1 例だけ所与の条件下にありながら変化していない例が存在する。それは七音清水（『皇極經世書声音唱和図』では声母を 12 に分類し、更にその中

を清濁および水火土石で4つに分類している)、つまり泥母(娘母を含む)陰調(上声のみ)の現れる箇所にみられる。

「開」：「発」

乃 妳

「乃」は主母音が前舌化する条件にあてはまるので、「発」の欄に置かれることが期待される。しかし現実には泥母と娘母の合流(というより、そもそも中古漢語では泥母と娘母には音韻対立する語彙がなく、従って音韻の対立はしていなかったとされる)により、二等韻にnaiという音節が存在することとなった。「乃」と「妳」は声調も一緒(上声)であったため、「乃」は合流を回避してnaiのままであったと考えられる。「乃」(すなわち、そこで)と「妳」(乳)が、一方は文語的、もう一方は白話的であるものの、ともに常用語彙であったことも、この2音が合流することをさまたげた要因であろう。

これに対して、同じく声母が泥母であった「南」は、「発」の欄に配置される。この場合、同一声調の二等韻には「喃」という字が存在するが、これは「喃喃(小声で話す様子)」というオノマトペを表わすためのものであり、音韻体系の中ではむしろ特殊なものの部類である。そのため常用語彙「南」の主母音の前舌化を抑止することがなかったと考えられる。

- 14) 唯一、支韻・脂韻と之韻の間で対立が存在するが、これは実際には中古漢語の時期すでに相当合流が進んでいたと考えられる。

#### <参考文献>

- 遠藤光暁 1988. 「三つの内外転」, 遠藤光暁『中国音韻学論集』。白帝社:2001, 121-137。
- 花登正宏 1974. 「中古中国語の喉音韻尾 — とくに曾・梗両摂の合流について —」, 『集刊東洋学』29, 1-21 (146-126)。
- 平山久雄 1966. 「切韻における蒸職韻と之韻の音価」, 『東洋学報』49-1, 42-68。
- 1976. 「中古漢語の音韻」, 牛島徳次ほか『中国文化叢書1 言語』。大修館書店:122-166。
- 1993. 「邵雍『皇極経世書声音唱和図』の音韻体系」, 『東洋文化研究所紀要』120, 49-107。
- 黄 錫凌 1967. 『粵音韻彙』。中華書局。
- 河野六郎 1968. 「朝鮮漢字音の研究」, 『河野六郎著作集2』。平凡社:1979, 295-512。
- 頼 惟勤 1958. 「中古中国語の内・外について」, 『中國音韻論集』。汲古書:1989, 236-262。
- 梅 広 1963. 「説文繁絜反切的研究」, 国立台湾大学中国文学系碩士論文。
- 佐藤 昭 1973. 「中古中国語の曾撰梗撰合流の進行過程」, 『集刊東洋学』29, 59-75。

- 蔣冀騁·吳福祥 1997. 『近代漢語綱要』。湖南教育出版社。
- 王 力 1936. 「南北朝詩人用韻考」, 『清華學報』 11 卷第 3 期, 786-842。  
—— 1982. 「朱翱反切考」, 『王力文集』第 18 卷。山東教育出版社: 1991, 199-245。  
—— 1985. 『漢語語音史』。中國社會科學出版社。
- 嚴 學睿 1943. 「小徐本說文反切之音系」, 『民族研究文集』。民族出版社: 1997。
- 張 慧美 1989. 「朱翱反切新考」, 私立東海大學(台灣)中國文學研究所碩士論文。
- 張 世祿 1944. 「朱翱反切考」, 『說文月刊』第 2 号, 117-171。
- 周 祖謨 1936. 「万象名義中之原本玉篇音系」, 『問學集』。中華書局: 1966, 上卷, 270-404。  
—— 1942. 「宋代汴洛語音考」, 『問學集』下卷, 581-655。